
リワコさんの大冒険

niche

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リワ「」さんの大冒険

【Zマーク】

Z8191W

【作者名】

niche

【あらすじ】

自殺から転生タイプのファンタジー。異世界でリワ「」さんが死ないよう頑張ります。山も谷もなく平易な道をゆきましょ。

ボーナス（前書き）

よく書き直す気がします。“めんなさい。

ボーンズ

なんてことだ、せっかくがんばって死んだといつに
なんで生きてるのだ

まさかまさかと思いつつ、ぬぐいされなかつた疑念はついにほん
とうになってしまった。

ミッションちゃん現象だ。わたしはしつかり自殺した。太い梁に
これまた太いロープをぐるぐる巻き付けて、わっかに首を通し、た
いへんな勇気とタイミングとを必要とする一歩を踏み出した。首吊
り結びと頑丈な横木はわたしの体重を楽々支えてくれた。迅速に血
流が止まり、それから数秒で意識は刈り取られ、数十分で肉体は生
命活動を停止するはずだ。わたしは間違いなく死んだ。
しんだ、のだけれど。

「 、……」

女性が上機嫌に笑っている。満足に動けないわたしを抱き抱え聞
きなれぬ言語で語りかけてくるその女性とは、その深い緑色の長い
髪をなびかせる女性とは、わたしと血肉を分けたお母さんであり、
一人目のそれだった。

ミッションちゃんと違うのは、わたしは身体新たに最初からやり
直さねばならぬ、ということ。

転生。

わたしはまた生きて死ななければならぬ。

あつちでは、前世の記憶を持つものは少数派だった。少数派どころかそんなこと例えれば初対面で言つてみれば、不思議ちゃん、電波、中一病、あるいはアブナイ人と思われるものは免れないだろう。

つまり、わたしの生きていた世界では、システム的に前世の記憶を引き継いで転生する、というのは考えにくい。し、私自身それがなかつたのでまったく信じていなかつた。

そして、「らんのありさまだ。

一週間ほど呆然自失としていた。ものの、それなりに情報は入つた。わたしはリワコと呼ばれたし、恐らく父親である人にもあつた。父親は黒髪で、真っ赤な瞳をしていた。なんだか透明な水晶をわたしの腕にくくりつけていった。

水晶を見ようと伸ばしたわたしの手は丸々とした赤ん坊の手で、血色のいい肌色だ。指が四本なんてこともない。

しかしあの髪の色はな。緑だ。緑と言うのはたしか、前世では染めない限りあり得ない髪色ではなかつたか。父親の瞳も真っ赤だ。アルビノなんかの血が透けたような色には見えなかつたが、詳しくは知らないのでこちらは決定打に欠ける。白子であれば気味悪がられないよう髪を染めるのも当然といふのは、いかにもありそうなことだ。

さて、ここで一週間で得た知識を投入しよう。鏡に写つたわたしの生え揃つていらない頭髪も、しつかり深緑。そしてだめ押しと、瞳も真っ赤つかだつた。

ほかにわかつたこと。1 - 木造建築住宅。2 - 電化製品がない。

3 - おかしな照明がある。

3つめの照明は、わたしの腕にくくりつけられた水晶のようなものを、上下金具で万力のように締め付けたような形になつている。母親は頭の部分をさわって明かりをつけていた。父親は触らずともつけられるようで、仕組みが全くわからない。

いつたいぜんたいなんだろうか。ここが死後の世界なのだろうか。みんながみんな前世の記憶を持っていて、世界の根本の法則

かなんかが違つて、前の技術を再現できず、新たな技術に頼つていいのだろうか。

死んだら少なくとも、生きていた世界と関わることができなくなる。死んだ後なんて、わかつていたのはそれだけだったはずだ。天国も地獄も無も、全部空想だ。死んだ人は帰つてこないから、生きているものには知りようがない。幽霊はわたしに関わってきたことがない。

それでもわたしは、死んだら無になると信じていた。搖るがす材料は十二分にあつたが、だからといって信じるとなれば別の話だ。無にならなかつたのは、喜ばしいことだ。わたしは無になりたかつたわけではない。とりあえず今わたしは生きている。しかしだ。この世界では、どうなのだ。

死後の世界でも、人間は死ぬのか。ここでもわたしは死ぬのか。また、死ぬ前に死なねばならないのか。

わたしは生かされていた。何から何まで世話をされてやつと生きていた。飢えにより泣いては栄養をもらい、不快感に泣いては排泄物を処理された。細心の注意の上の、ぬるま湯のお風呂にも入れてもらつた。わたしはじつに脆弱で、人間の生まれて育つていくのをまじまじと見ていた。やっぱり気持ち悪い、と思った。人間は動物だつた。生物だつた。脳みそと臓器との集まりでしかなかつた。にんげんは生きているし、死ぬ。赤ん坊に人権などない。

吐き気がした。

死んでも生まれなおすのに、死なねばならぬのか。いやもつと悪い。生まれなおす保証はない。わたしは、消滅に怯えながら、死ぬ前に死なねばならない。これならいつそ無になつてくれたほうがよかつた！

わたしは何より死ぬのがこわかつた。

なにより死ぬのがこわかつたから、死なずにはいられなかつた。自ら死ねば、少なくとも自分で時期を決めることができた。いつ死ぬかわからぬまま生きることの辛さつたらない。なにより死にた

くなくつても、わたしは動物で生物で、そしてぜつたに死ぬのだ。あるいは、ここでは人間は死なないのか。もしも、死なないといふならわたしが死ぬ理由はなくなるぞ。ねえ。どうなの。

動悸がする。目頭が熱くなる。息が荒くなる。生物だ。これが生物だ。脳と臓器の集まりだ。

しかし、どうして前世の記憶など、持っているのか？

脳が見せた夢か、はたまたそれ以外になにか、あるとでも言つのか。

わたしはまだ満足に動けもしない。その年齢の脳とは、果たして思考に耐えうるのか。

もし脳以外のなにかがわたしの思考機能を補助しているとすれば。それはつまり、脳と臓器以外のなにかだ。筋肉でも脂肪でもない。身体から離れたなにかで、それは脳の役割を果たす。それが死ななければ。肉体なしでも成り立つというなら。劣化しない殺せないと言つなら。もしかしたらわたしは、わたしは、死なないでいられるかもしれない。

死なないでいられるかもしれない！

死ぬことが唯一のわたしの絶望だ。

考える。わたしは記憶を受け継いだ。生後一ヶ月にも満たない児の脳がその記憶に思考に耐えられるはずがない。肉体以外のなにかがここにはあるはずだ。感じろ。肉体とそれをまず分けるべきだ。それがわたしの第一歩だ。第一歩に違いない。

瞼を下げる。

瞼を下げる、ということ。その行動さえわたしは自分の肉体を感じられない。あたりまえにあるのはただの無意識で、それはじつさいの肉体とは違う。これが差異だ。赤ん坊の頃は瞼は瞼で、手は手で、指は指で、すべてを動かすのに意識が必須だつただろう。それがない。補助されている。無意識だ。それがたぶん、なにかの

正体だ。

それから起きている時間はその差異を感じるので、言語の理解と
に費やした。

窓の外では季節が巡った。四季は、あるよひだ。

わたしは三歳になつていた。

この三年間で、わたしは世界は丸くないのを知つたし、一人でふわふわの天蓋ベッドで寝るようになつたし、そして、ふつう、前世の記憶がないことも知つた。知識の出所は、ほとんど父親の本だ。あの書痴は偏りなくあらゆるジャンルの本を集めているようだから、たぶん間違いはない。世界が平面なのも、前世の記憶がふつうの人にはないことも。此処ではそれが正常だ。論理だ。

春。肌寒かつたりぽかぽかの陽気だつたりを繰り返しながら、世界はだんだんと暖かくなつていった。今日は四月第一週日曜日。三歳児のための、はじめての、青空魔法教室の日だ。

わたしは本を仕込んだ鞄を背負つて、シャツにハーフパンツという少年のような格好をして、父親に手を引かれ公園に向かつっていた。髪を短くしているのも相まって、どこからどうみても、男の子にしか見えないだろう。こういう遊び心は、今しか成立しない。体が成長してしまえば、わたしは完全に女になる。すべての要素は女を引き立てるためのスペースに、成り果てる。

公園では、そろそろ聞き分けを覚えてきた子供たちが、いくつかの固まりになつて遊んでいた。後ろに送迎の親御さんたちがこれまた固まつて喋つておられる。父親が無言でわたしの背中を押した。三年間、家に籠つて父親の蔵書を読み漁つていたわたしに、知り合いなどいようはずもない。あるいは、それを心配して、父親は魔術の勉強は十分のはずの私を連れ出したのか、なんて邪推が巡る。わたしには父親の考えなんてわかるはずもなかつた。ひとの考えなんて、わかるはずもなかつた。想像するだけ無駄である。しかし、わたしはそれをやめられない。もしもだ。もしも、わたしの邪推があつて、いるというなら。申し訳ないなあ、と思う。わたしは自ら期待に応えるつもりは、なかつた。あまり騒がしくないところを選ん

で、ときどき外で読書をするときに使う、母親自作のマットを敷いた。

きちがいに刃物というが、子供と魔術も、それに似ている。死亡事故なんてざらにある。というのが、勿論本から得た知識だ。それでなるべく幼いうちに、魔術を制御できるようにしよう、という意図により、この青空教室は毎年三歳児を対象に開催されているそうだ。人間集まれば差異を感じるものだ。各家庭できちんと教えられるのが理想的ではないかとは思うが、そううまくいかないのだろうか。生死がかかっている以上、専門家にお願いしたほうが現実的か。

父親はといえば、集まっている子供らを挟んで、父兄席を正面に、ひとり立っていた。

「これより魔術講座を始める」

威厳あるモードだ。子供たちのざわめきがピタリと止まり、期待多目と少量の不安との入り交じった視線が集まる。

「私のことは先生と呼びなさい」

つまりだ。この教室の先生は、わたしの父親だった。もう何年も続いているらしい。どうも普段とのギャップが激しくてなんとも言えないきもち。魔術の話をよく聞こうと、子供たちが近づいて取り囲む。後ろでは母親たちが授業参観のように様子をうかがっていたり、一方声が届かないところまで移動しておしゃべりを続けたりする姿が見えた。

「魔術とはつまり、何ら不思議なことではない。赤子だって起こせる。

そして何ら不思議でない、という意識が最も大切だとも言える。

その点君たち子供は非常に優秀だ」

子供ゆえの万能感が、簡単に事実をねじ曲げる。私とは違つて、

この子達には起こるはずがない、なんて根深い意識がない。

「だがその、優秀であるのが問題だ。魔術を使いすぎるとどうなるか知つているか?」

「死ぬ！」

少年が元気よく答えた。死ぬというのが、どういうことかわかっているのか、と尋ねたくなるような、そんな声だった。

「そうだ、死ぬ。精神体が死んで、肉体のほうはただの皮袋に成り果てる」

父親は、少年を底の知れない真っ赤な瞳で見つめたあと、一同を見渡した。

「だから。ここでは使いすぎない方法を学んでもらう。その前に魔術とはなにか、だ」

不思議とわたしとは目が合わない。

「魔術はただ使用者の意識に依る。

お前が思うならそうなんだろうな、お前のなかではな。ということを、精神体でもって、魔素を少しつつことで実際に起こしてくれる。

少しでも迷いがあれば駄目だ。迷いさえ反映する。起こすために必要な量の魔素を掴むこと、そして迷いを持たないこと。これだけで魔術は起こせる」「

かんたんかんたん。なにもむずかしいことはない。自分を信じる才能がひとつ、そしてもうひとつ。

「魔素を掴むのは精神体だ。こっちの把握はできているか？」

精神体を扱えさえすればいいのだ。

精神体とは、私のいうところの無意識だ。無意識、という言い方には語弊があった。この無意識、認識さえできてしまえば意識して動かせる。つまり、これが精神体だ。

この世界では、肉体と精神体が並び立っていた。肉体が死んでも人間は死ぬし、精神体が死んでも、人間は死ぬ。魔素とは、精神体にとつての酸素だ。これがなくては精神体は弱り、ついには消滅する。運動すると息切れするのと同じで、精神体を扱うと消費量も増えるし、それから魔術の元にもなる。

精神体の扱いが未熟な、しかし万能感は人一倍の子供が。ひょつ

として魔術を起こしてしまつたなら。それがどうして大怪我にならないというのか。

だから子供は死ぬ。たくさんの子供がただの皮袋と成り果て、死んでいった。そうだ。人間は死ぬ。

「把握をしないまま魔術を使うのは危険だ。

把握できているかどうかわからない、といつのも無論駄目だ。

しつかり感じ、理解するところから始めろ」

生まれてすぐに藁をもすがる思いで始めた訓練は、過たずわたしの一歩であった。自殺前は大人の体だったので、それに則した大きな精神体を持つことになる。当然、それは子供の体からはみ出す。この辺りに、不死の糸口がありそうな気がしているんだけどな。肉体という核の外にだって精神体は伸びる。そしてこの精神体は肉体に引っ張られない限り、老化しない。

ともかくだ。はみ出た精神体は魔術を使う上で問題にはならない。それどころか、より多くの面積の魔素を捉えることができるわけで魔素を掴むまでは問題がなかつた。

ただ、迷いがあつた。前の世界の遺産の『できるはずがない』という意識は根が深い。理解していよるとも、捨てきれない。

父親にどうもうまくいかない旨を相談すると、魔術をひたすら起こしてみることを勧められた。例え小規模だろうが、自分で実際に起こしてしまえば、根は少しづつ腐っていく。

あるいはわたしをこの教室に連れてきた狙いは、他の子供の魔術を見ることで、それを払拭してほしいとのことだったかもしれない。なんだ、お父さんはしつかり先生をやっているじゃあないか。

「では精神体の把握を始める。私は周回する。

もし、許可なしに魔法を使えば、罰を『える』

氷のような脅しが響いて、子供たちはそれぞれ思い思に課題に取り組み始めた。

さて、わたしも課題をこなさねば。どれだけ早く認識できるかと いうのが大事だ。無意識を意識して、制御下におく。肉体との差異

から始まつたわたしの精神体についての認識は、今やその外、はみ出た部分にまで及んでいる。次の段階は取り込んだ魔素を感じる辺りだろうか。ここからはまだ未熟だ。目を瞑った。五感を封じて、肉体からの情報を減らしでもしないとつまらないかない。どうも集中できていられない。

子供たちとわたしは、一時間ほど悪戦苦闘したところで、解散の号令が出た。次の授業は来週だ。

遠くで父親が子供に群がられて忙しそうにしているので、どうもなかなか帰れそうにないなあと思う。一人で帰つても良いのだが、あれを書き分けて伝えにいくのは面倒だ。

木陰までシートを引っ張つて、腰を下ろした。鞄から読みかけの本を取り出した。しおりを見つけてさあ読むぞ、とその時。声をかけられた。

「それってドラゴン？」

声の持ち主は、暗い金髪をハーフアップにした、身なりのいい少女だった。ジト目ぎみの厚い瞼からは、誰もが一番印象に残すだろう、強烈な一組とないオリーブ色の瞳が覗いている。

「そうだよ」

わたしが読んでいたのは図鑑だった。人間含め知能の高い生物をあらかた網羅しているそれだったが、やはりドラゴンは有名だから表紙、そして解説のほうも多分にページを割いてあった。

彼女は無表情ながら、好奇心でキラキラと輝く瞳で、わたしの持つ本の表紙眺め回していた。

「ドラゴン好きなの？」

「うん」

憮然とした表情が一気に弾けた。満面の笑みだ。彼女は溢れんばかりの笑顔を称えて、好奇心で燐る碧眼を細めて、私に頷いた。やだかわいい。

わたしだつて、一人で生きたいわけではない。人間のことは大好きだ。ただ今は、かまけている暇がないと、あくまでそういうこと

だ。死んでしまえば、人間と関われないので。いきる手段を確立するほうが、当然優先順位は高いだろう。だからといってわたしも、ずっと根を詰めている自信はない。繰り返すがわたしは人間のことが好きなのである。このかわいらしい生物のことがだいすきなのである。

尻半分ずれて、ギリギリ一人分できたスペースをぽんぽんとたたいた。大樹の木陰を風が吹き抜けていった。ページをしつかり押さえる。しおりをとつたばかりのそのページに戻し、田次からドラゴンの項目を探して、開いた。ちょこんとわたしの隣に座った彼女が歓声をあげた。迫力ある図があった。

「ドラゴン　は　高位の魔法生物　の中でもっとも有名な

」

驚いた。彼女が文字を読み上げていた。見やすいように本の位置を調節してあげる。この図鑑は広範な種類の生物をそこそこと詳しく偏見を入れない立場で解説していて、冒険者向け、あるいはその類いの研究者入門あたりの知識量はある。三歳児を甘く見ていたかもしれない。

今この時間にここにいるのだから、講座を受けていた可能性は高いだろう。どこかいといころのお嬢さんにしては、青空教室は不自然だ。それでいて、三歳でそこそこ高度な文字を読める教育を受けられる程度のお家柄。あるいは魔術を扱うのに反対で、お忍びであるとか、そういうことなら考えられるだろうか。こちらといえば、青空教室の教師だ。本業ではないがまあ家柄としてはごく平凡、失礼があつては困るところだ。ドラゴン好きなくらいだし問題ないだろうか。子供同士でそんなこと考えるのもおかしいのか。常識が足りない。時代が時代ということもある。

ここでは身分の違いというやつがある。とはいっても暗黙の了解レベルで、そんな仰々しいものではない。この国は商業が活発な国なので、貴族といつても名ばかりに毛が生えたようなものだ。あるいは羽振りのいい商家様のほうが影響力があつたりする。しかし商

家であれば、身分を任せじ気にしないことが無い。あくまで多いだが。

ときどき裾を引かれては彼女の読めない単語を読んでやり、将来有望なこの子に肥料を『えてやつた。あるいは望まぬ方向に延びるかもしけないが、そんなことはしつたこひちやないのである。わたしはこころゆくまま、このかわいらしい、ドラゴン好きの彼女を構いにゆく』ことを決めた。

一際強く風が吹いた。肌寒さを感じて空を仰ぐと、太陽は今にも見えなくなるうとしていた。平面の世界では太陽のほうがまわりだす。少しずつズレながら裏世界と表世界をいつたり来たりするので、四季ができるようだ。果たしてなんの法則によつて太陽は動いているのだろうか。それすら解明せねば、わたしに未来はない。宇宙ヤバイ。

「日が落ちたね」

彼女は、文字の読みにくさを感じなかつたのだろうか。改めて、こじがかなり暗いことに気づく。ドーラゴンに夢中だつたのか、そこまで、好きだと云うのか。

「もうこんな時間。

私はミザ。なまえ、教えて

「リワコだよ」

「リワコ、その本、知らなことたくさん書いてあって面白かつた。来週も来る?」

「たぶんね」

「うん。じゃあ帰るね」

「気を付けて」

好きなものがあるにんげんは、とてもまぶしいと思つ。

彼女に本を探してあげよう。ドラゴン専門の本だ。読んだなかでも一等分かりやすかつたのを準備してあげよう。それと辞書も必要だろうか。ああ、来週まで、厳選しなければ。

真っ赤に照りされた小さな背中を見送りながら、わたしは微笑んだ。賢く愛らしい子よ。〃ザ。あるいはわたしのはじめてのともよ。

さて。わたしの父親は今ビル立てるのかしら。わたしに声をかけようともしないとは、信頼されていると見て、いいのだろうか。難しこころだ。さてさて、わたしも、ひとり帰りましょうかね。

前回から本一冊分膨れ上がった鞄を携えて、わたしは再び件の公園にやつてきた。

今日から実践が入る。先週の様子を見て、精神体の把握ができるものから、魔法を使わせる、と先生がおっしゃった。

結果。わたしとミザ、そしてもうひとり。

猫耳つきのフードの奥に、ふじ色のさらさらした猫つ毛、それに負けないぐらいうまの薄い頬、絶妙な下がり具合の田尻、その虹彩はいぢいぢ色。

どこからどうみても、男の娘だつた。

それにも此処の子供たちは才氣に溢れすぎてやしないか。わたくしなんて三年かけてやつとこれですよ。一週間、いや一日ですか。そうですか。

「いいか、絶対に魔素晶以外の魔素を使うな」

課題ができていらない子供たちから少し離れたところに連れられ、こぶしほどの魔素晶をひとり1つずつ渡された。このぐらいの低級品なら銅貨2、3枚 200円もあれば20~30個は買える。正貨なので相場はよく変動するが。父親はそのやたら赤い瞳で、最後にわたしをじいつと見て、あつちに戻つていつた。

なんだ、その含みは。わたしは頼まれたのか。それとも失敗したら承知しないぞってことか。どっちもか。ですよね。悶々としたがら遠くへいく背中を見送つた。ら。

「……きみ、先生の子供だら」

ぎょっとして猫耳の子を見た。そのいぢいぢ色の瞳とまつすぐ視線がぶつかって、ますます、ぎょっとした。

「なんでわかるの」

「きちがいみたいな瞳がそつくりだ」

鈴を転がしたようなボーケープラノで毒が吐かれた。内容には異

論ない。異論ないけどお前そんなかわいい顔で三歳児のくせにあち
がいとか言つなよ！ どつうことだよ！

「それに見ない顔だ。先生の子供は家に籠つてゐつて噂だつたし。

色も白い」

「日光浴びないとからだに悪いし、ときどきは外で本読んでる……
もん」

「えらいぞ」

そしてこの笑顔だ。笑顔がかわいい。そして頭をぽんぽん、と子
供扱いされた。大人に子供扱いされるのとはまた違つた感覚だ。新
鮮で、なんとなく面映ゆい。彼はガキ大将ポジションなのだろうか。
わたしより白いよつた顔しやがつて。

「ベルだつて結構引きこもつてゐくせに」

あつそなんだ。

「ま、いいからやらない？」

一瞬で空気を変えちや「ひ! ザさんつてばそんなとこがほんとうに
素敵です！」

さあてなにを起しそうかなあ。

ミザは水で子細なドロゴンをつくつて動かしているし、ベルくん
は魔素で作った光の線で人間の切り身とその中身を描いていた。ふ
たりともじつに個性的だ。

じゃあわたしは女の子らしくお花でも育てますか。

しゃがんで、地面を手で覆つた。このわたしの小さな手でつくり
れた暗闇から、小さな命が今にも生まれる。イメージだ。手を開く
と緑色の芽がむくむくと育つ。つぼみが膨らんで、花が開いた。真
っ白い花弁。芯のまわりが赤い。魔素の供給を止める。その純白は
みるみるくすみ萎み、枯れた。

植物の精神体は、わたしには作れない。想像ができないものは、
作れない。役割だけでは、創造に不十分だ。概念ではあるが、足り
ない。生命のあるものは、魔術で作ることは難しい。

残っている魔素晶を分解し、魔素とした。精神体で圧縮しながら、生命の種にする。再び地面を覆つて、そこに高濃度の魔素も隠す。きみはこれから精神体の代わりになるのだ。もういちど、花を咲かせた。魔素の供給をやめる。花は、枯れない。

魔素から生まれた花だ。モンスターと変わらない。今後なにを起こすのかわからないので、摘み取った。

一息ついて立ち上がる。強ばった精神体を伸ばしてやる。肉体も、膝が濡れてしまっていた。軽くはたいてはみだが、あんまり効果がない。こんなときこそ魔術さんの本領發揮であるとおもうんですがいかがですかね。しかし魔素晶は使いきってしまったし、モンスター花にあげた魔素はもう変質している。ちょっとくらいいかしら。だめ？

ミザとベルは夢中で魔術を使っている。ちらりと先生に視線をやつてみた。

にやりとこっちを見て笑っていた。

心臓がすごいおとをたてて鳴つたので、すぐさま顔をそらした。なにこのせんせい、なにこのおとうさんこわい。

わたしは大人しく汚れたままでいることにした。ぱくぱく言つ心臓を落ち着かせながら、ゆっくり鞄を下ろして、シートと本を出した。やることないしミザ用だけ持ってきた本でも読みます。読むことにします。

「三人は今日で卒業だ」

授業が終わって開口一番に先生はそれを告げた。

「人数多いと面倒見るのも大変なんだよ」

「なるほど」

子供が子供を監督するなんて考えが甘かつた。監視役など必要あるはずもなかつたのだ。だつて教えながらわたしに気づくんだもんこの人。三人ありがとうございましたとお礼を告げた。

ミザもベルも二十分もしないうちに魔素晶をすっかり使いきつて、

後半は先週のように一緒に本を読んだ。ベルは退屈そうに辞書をぱらぱらめくつていた。

さてどうするか。授業は終わりだ。本を渡して帰つたら接点がなくなつてしまつ。取り戻しようがない。どうしようかしら。ミザはわたし視点で非常にかわいい生き物にカテゴライズされるので、貸さないと言う選択肢はあまりとりたいところではない。接点を作るにはどうしたらいいのかしら。

ぼうつと空を眺めながら散漫な思考を展開していると、ベルがとたとたわたしに向かつて歩いてきて、なかなかの近距離まで詰め寄つて、じいじとわたしの瞳を見つめてから、『ぐく自然に口を開いた。

「リワコの家つて、本たくさんあるんだる」

「そうだとと思うけど」

ベルの瞳に[写]るわたしが見えるほどだ。ふじいろのまつげが白く浮いて、揺れている。近づくことをさして重大なことだと感じていないのだろう、と空想する。あるいはわたしの瞳を見たかったのか。見るためには、当然、近づく必要がある。

「医学書とかも？」

「あつたと思うけど」

「それって僕も見れる？」

「あ、うん。うち来る？」

ベルが真顔でこくこくと頷いた。ベルくんはどうも医学に興味があるようで。裾を引かれるまま横を向けばミザがキラキラした瞳でこちらを見ている。はい。じゃあみんなでうちにこつか。

畠下がりの陽気が気持ちいい。温い風が強く吹き抜けた。ベルのフードが背中に落ちた。隠されていたボブカットが、風にあおられて形を崩す。畠間の太陽のもとでは、その色はほとんど銀髪だ。

「僕の家、治癒魔術師の家系なんだよね。」

「医術学ぶなら魔術の方は教えないって」

「それで教室に？」

「うん。」

まあ、才能ある子はすごい。

確か、治癒魔術と医術は才能あるものとないものの分業制だったと思う。単純に知識量が多いこともあるが、それ以上に、食べていくためのシステムだ。ふつう、医療に携わる家系で、魔術の才能のない者は学校に出されて医術を修める。ベルは、見ての通りの才能のないわけではなかつた。その、どちらもたてようとしている。バランスブレイカーだ。ブラックジャックにでもなればいいが。

治癒魔術の本はあつたかなあ。わたしが読んでないのだから無さそうだよなあ。一子相伝とか、そういう技術なのかな、やつぱり。他人の肉体を治療するためには、精神体を関わらせないまつさらな肉を再生するか、他人の精神体を操つて治すか、くらいしかわたしには思い付かない。他人と同調できてしまえば一番いいんですけど、それって難易度高い。精神体なんてひとりひとり異質なものだ。その辺を解決したのが、治癒魔術のかしら、と思つ。

「本を読むだけならなんともいつてこないから、習わないことにした」

「それってわたしも読める？」

「無理かも、……僕が覚えてる範囲なら教えられるけど」

「さつすがベル様ははなしがわかる」

「医学書読ませてもらえるなら、できる」とはする

リワコはこれで死にづらくなりそうだ。

わたしに教えたことでベルが面倒なことにならないといいけれど。わたしも広めるために翻訳じゃないし、まずなさそうだな。

あれからわたしの家はこの一人の溜まり場になつて、この一年、毎日のように三人で書庫をひっくり返したりしたのだが、そんなことはどうでもいい。

わたしは今猛烈に気分が悪い。

それはつい今すっかり読み終えた本のおかげで、その内容は、どうも、精神体は肉体なしではそれを保つていられないらしいということだ。

一般教養はそこそこ手に入れたので魔術と精神体の勉強をちょっと詳しくやってみようと思った矢先だつた。手を伸ばした文書を要約すると、肉体が寝ているとき、精神体は動きを制限される。精神体にも睡眠が必要なのか、あるいは肉体に引っ張られているのか、と疑問に思った学者たちは、肉体が睡眠時に精神体を起こすことには成功したらしい。結果、通常の環境と言つ条件下で、被験者の精神体は肉体を離れ、174秒後に消滅。肉体のほうは生ける屍となり果てた。起こしただけなのに、精神体がなぜ肉体を離れたのかわかつていない。起こすための術式を起きている人間に試しても変化はなかつたので、術式ミスの線は消えている。それ以上は記述はなかつた。

無意識は意識をおいて成り立たないとでもいうのか。精神体は、無意識ではなかつたのではないか。概念の遊びだ。しかし此処では、その概念さんがえらい力持ちで、わたしは希望を絶望を日々入れ換えている。

「困ったな」

わたしはため息と一緒にか細い声を出した。今に始まつたことはない。わたしはいまでも何度もこうして落ち込んだ。これは、わたしにとつて、慣れるという類いのものではなかつた。

どうするか。これでは、精神体だけではいきられないではないか。

やつぱり、肉体と精神体は同格なのだ。困った。肉体以外に定着できるものを探すか、肉体を壊さないようにするか。あるいは精神体そのものを肉体とするか。どれも並大抵のことではないだろう。魔術は万能ではなかつたし、壊れないものなど、ない。

どうしてなのか。肉体を持たない精靈やら幽靈やらといふ存在は、図鑑にごまんと乗つっていたのに。なにが違うというのだ。精神体の変質なんて、わたしはやりたくないぞ。ああもう。

お前は今徐々に死んでいる、と改めて突きつけられている。改めて突きつけられないと気付けない、自分の愚かさにほとほと呆れ返る。今のままではお前が死ぬのだ。わかっているのか。今すぐ死ぬ可能性だってあるのだ。その時に死ぬことを思い出したつて、遅い。無様に死にたくないと思つたまま死ぬんだぞ。おまえは、ほんとうに、わかっているのか。

だめだつた。なにもできなかつた。気力がないまだらしなくソファーに寝転がつて、機嫌が悪いままベルのスペースを奪つてやつた。ベルはさして気にならない風で、肘掛けから足を乗り出して、人体とその効率の良い捌き方を、魔素で一心不乱に空に描いている。わたしはそれを意識的に意識からはずして、読書をするミザの暗い金糸を緩急つけて引っ張つたりしていた。子供の毛はどうも抜けやすい。いくら気が塞いでいるからといって、かわいいミザに十円ハゲを作るなんて所業をわたしが許すはずもないで、思いきり力を込めようとする指先を制して、慎重に頭皮を引っ張る感覚を感じながらの、髪の毛引っ張りだ。ミザは自分の頭皮のことなのに、我関せずと本に集中している。

「ううう」

唸りながら、髪を離した手をパタンと下ろした。ぐりぐりとベルの背中に頭を押し付けた。悲しくなつてゐる。情緒が安定してない。わたしはまた死ぬのか。死なねばならないのか。うお一人間が死ぬ。しぬ。死ぬぞ。

「気持ち良いからもつとして」

「あつ、はい」

ミザさんからお叱りが飛んだので体勢を直し、正座で髪の毛引っ張りを再開した。空いたスペースにベルがぱたんと倒れ込んだ。わたしの太ももに頭が勢いよく当たった。気持ち良いか。頭皮マッサージ的なあれなのか。皮剥がれたりしないのかな。どうもそういう感覚がこちらの手には残るのだが、ミザさんのほうはそうでもないのだろうか。きもちいい。きもちいい。きもちいいからもつとしてつてすゞしい言詞だな。

しばらく無心で引つ張つていると足が痺れ、いいかげん飽きた。ソファーを背もたれに地面に座り込んでいるミザを両足で挟んで、今度は髪の毛をとかしてみたり、みつあみを編んでみたりし始めた。ミザの瞳はもちろんだが、髪も良い色している。くすみ方がアンティークの金属ような風合いで、地味ながら凄みがある。これも肉体である。これを捨てるとなつてみると、少し惜しいような気もしてくれる。宝石の瞳やら、気品ある金髪やらが、動いているということ。これは奇跡だ。素晴らしいことだ。動くことが当然となれば、不死性を持てば素晴らしさが薄れるかといえば、それでもない。他が死ねば良いのだ。人間は他人の死を通さずには、自分の死を感じることなどできやしない。本人の自覚が人間であるかぎり、その生は搖るがない。ふつう死ぬはずにも関わらず、生きているということ。それは、その美しさをますます高めるのではないか。しかし不死性。やはり夢物語だ。その難しさを再確認した。

バタンと本が閉じる音が聞こえた。

「森にいこう」

終には両サイドでリボンの装飾のついたツインテールになつていったミザが、くるりと振り返つて、言い放つた。太ももの上でベルの頭部が動いた。

「ドラゴン探すの」

瞳が底光りしている。その有無を言わぬ迫力に、わたしは頷いた。

私たちの住んでいる街は、さる樹海に隣接している。セイはドラゴンを産み出す「」の世界でも珍しい場所で、なかなかどうして神秘的だ。

浅いところは子供でも問題なく通り抜けられるが、少し分け入るとドラゴンやらに鉢合わせる確率が跳ね上がる。それはこの森、一定の距離を踏み込むと魔素濃度が跳ね上がるからで、魔素から生まれる種類の生物が多数たむらすことになるわけだ。

ドラゴンは魔素の濃いところで、単性生殖で生まれるのだが、この森の中心部はそのドラゴンが生まれるのに適する程度の魔素場だった。少しずつ奥に進んでいると、魔素が肌で感じられるほど濃くなる。ここに魔素が集まる理由と言うのは、解説されていない。

先頭を行くミザと、横道に逸れながら歩くベルの様子を注視する。具合が悪いようには見えなかつた。一安心。

一年間。そこそこ魔術の訓練もした。結晶化した魔素の扱いはお手のものだが、空間全体に魔素が多い「」の樹海では、魔素酔いが起こりやすい。精神体がびっくりしてしまう。

事前調査の限り、ここにはドラゴン以外逃げられないほど強いモンスターはいなかつたし、ドラゴンは種族的に魔素含有量の少ない人間を食うこととはまれだ。食うのがまれなだけで、飛ぶ羽虫を落とさないかといえば、また別の話だが。うるさくしなければいいのだ。たぶん。

ということで我々三人はなるべくうるさくしないように進んだ。前世の熊とか、人間に会わないようにしてくれるからわざわざ鈴をならしたりしていたが、こここの生物には人間に積極的に会いに来てくれるようなものいるわけで。そんなのに目をつけられてはたまらない。もし遭つてしまつたら即時退却まで決めた。

少し進んだところで、ベルが足を止めた。体調が悪くなつたのかと思ったが、顔色はいつも通りの透き通るような象牙色のままだ。なかを見つけたか。視線の先を追えば、そこには弱つた兎が一匹

横たわっていた。毛が黒い。

「黒表症？」

「……」

わたしの問いかけに返事もなく、ベルはピクリとも動かない兎にゆっくりと近づいた。彼の動作はごく自然で、ごく緩やかだつた。この兎が、生きていても、死んでいても、兎を助けようとか、助けないとか、彼はその境地にいなかつた。ただ兎を見ていた。兎の肉体と、精神体だけを診ていた。

木漏れ日が揺らめいている。最小限効率的に動いているのはベルだけで、この小さな生き物は動く体力もなく、息づかいすら聞こえる気がした。気づけば息を詰めていた。

「うん。先天性魔素充溢症だ」

診察には、人格が存在しない。

「それ、どうするの？」

「連れて帰るよ」

兎を抱き抱えたベルが応える。

連れて帰つて、どうするの。飲み込んだ。

ベルは、どうするというのだ。治すのか。治してそしてどうするのか。先天性魔素充溢症。それは生まれつき魔素を取り込みすぎるとの體質で、毛や皮膚が黒いという特徴がある。それで黒子だとか、黒表症だと俗には言われている。精神体の問題だと思うのだけど、肉体にも影響が出ている。

彼らにこのような森は危険だ。多少の耐性はあっても、まず倒れる。魔素を取り込みすぎると、魔素酔いがもつとひどくなつたような症状で現れる。それで倒れていただろうこの兎を、この魔素の集まりやすい森に戻したら、死ぬのは明白だ。ベルは兎を飼うのか。兎はベルになつくのか。動物に人格はないのか。人格を求めないほうが、兎は気楽なのか。診察も観察も人格を見ていないというところで、同じではないか。

「兎の人格なんて全くどうでもいい。問題なのは、なにもかも個体

差は誤差だ、と断じることができる人種がいるということだ。精神体も全く異質ではない。彼らの前にはただのパターンにしか写らない、ということ。

パターンにしか写らなくなつてしまつたら。どうすればいいの。わたしは。わたしのすきな人間は。その価値があるのか。ただのパターンに。その価値を見いだせるのか。肉体精神体と人格は、全く分けて考えていいものなのか。わからん。わからん。きらいだ。わからないし、だいつきらいだ。

「……気づいてる？」

はつとした。なにか、いる。ミザが森の奥を、わたしも気配を感じた方向を、睨んでいた。

「ベル、先にそれ連れて森を出て」

「わかつた」

ベルの気配が遠ざかっていく。ベルはこういうときグズグズしない。兎を連れて帰ると決めて、それで一番足手まといになるのは自分だとわかつっていた。足手まといが、助けられて、先に行く。そこに負い目もなにもない。ベルの美点のひとつだ。

それにしても、やらかした。ミザがいなければ死んでいただろう。反省はあとだ。今は、ここから逃げることを考えろ。

三人で一斉に逃げれば、間違いなく追われる。動物の習性だ。少し時間を稼いだあと、バラけて逃げる。そうすれば少なくとも全員が死ぬことはない。

「ミザ」

「うん」

じりじりと一人距離をとる。

木陰からしなやかな身を振るわせながら、敵が現れた。肉食獣だ。わたしの三倍もあるような、大きな犬だ。大丈夫だ。死ぬことはない。犬なら、この犬なら木に登らない。浮遊してしまえば大丈夫だ。大丈夫。

犬がその筋肉をめいいつぱい伸縮させてのびあがる。ミザに真つ直ぐ突進した。図鑑通り、7、8メートルの距離が一步だ。ミザはひらりと身を躰した。

犬の背中が見える。無防備なその獣の着地点を狙え。手持ちの魔素晶は温存したい。空間に有り余る魔素をわたしの広い精神体で掴んだ。

「凍れっ」

ビキビキバキと氷が温度にその身を軋ませながら生まれた。現地点の魔素を使い尽くして凍らせたので、すぐ精神体一個分横に動く。着地点の目測は少しずれたが、その氷山は犬の後ろ足を絡め取つていた。続いて破裂音が連續した。近距離にいるミザが、犬の耳元で爆竹を鳴らした。

平衡感覚を失つた犬越しに、その鮮やかな縁どぶつかつた。ミザは「ごく普段通りの顔をしていて、ごく普段通りの眼力で。やつぱりこの子はすごいなあと思いつながら、くるり、背を向けた。どちらともなく、わたしとミザは逆方向に駆け出した。

続いて地を蹴つた。浮遊の魔術を発動する。そのまま空を走るようになに一歩三歩蹴つて、そこから飛ぶ。イメージ。バランスを崩しながらもスピードを落とさないで飛行に移行できた。木の間を縫いながら低空で滑空する。後ろを見るな。ミザを想うな。ただ真っ直ぐ飛べ。今は。今は。進み続けているから、魔素は十二分に足りている。急げ。魔素が尽きるまで。

ふらりと体が傾いて、顔から地面に落ちた。魔素が足りない。濃度が濃いところを、抜けた。ここまで来れば。ひと安心だろ。たぶん。縄張り以上は、追つてこないはずだ。強かにぶつけた土まみれの顔を痛みをこじらえながらゆっくり上げる。

顔を上げた、ら。

真っ白な体毛を赤く染めた、白狐がいた。一尾のふさふさした尻尾がゆらゆら揺れた。

あんまり神秘的だつたので、前後を失つた。ほんやりと見とれた。白狐はわたしに警戒というものを微塵も抱かせない動きで、わたしの前まで歩を進める。脇腹あたりから、ぽたぽたと血がいきおいなく、地面に滴つていた。

なんだか、ものすごく、嫌だつた。欠落したように白いその毛皮に赤色はひどく似つかわしくて、というか、べらぼうに相応しく見えすぎた。その対照から目をそらせなくて、ますます嫌になつた。視線を力強く地面に戻し、ふう、と一息つく。手で体を支えて、地面から上半身を離した。白いシャツがべつたりと湿つた土で汚れてしまつた。着替えてくればよかつた。下は黒いハーフパンツだったので、靴下以外は目立たないだろ。わたしのほうは。

問題は狐さんだ。どうにか取り除こう、と決意した。それに、このままでは、その真っ白い毛が、染みになつてしまつ。言い訳のように付け足して、立ち上がる。自在に揺れる尻尾の手前、血のベッタリついた脇腹を掻き分けた。怪我はないよつだ。白狐さんはわたしに触られるのに抵抗がないようで、すこし嬉しくなつて、話しかけた。

「きみは五百年も生きたの？」

反応はない。白狐さんはただはじめから一つの尻尾を揺らしていく。

「その真っ白い毛は生え変わるのかな」

もとより、返事は期待していなかつた。わたしが話しかけたいから、話したのだ。ただ、この白狐はこっちの言つていいことがわかる、とわたしは半ば確信的に思つていた。

シミを消す魔術は、体毛にはあんまり使いたくない。まだ固まつていないので水で落ちるだらうか。懐から魔素晶を引っ張り出して、水をイメージした。まず己の手を清めた。次に浮かせたままの水球から水を掬つて、血に染まつた体毛にゆっくりかけた。徹頭徹尾金色の瞳がわたしを射ぬいているが、その脇腹は大人しくしてくれていた。

水球がなくなるまで繰り返すと、白狐さんの脇腹はびしょびしょで、わたしの服もずいぶん重くなつていった。体毛は大分白くなつていたが、透き通る白さにはあと一歩足りない。もう一度。

水球をそれから二つほど消費して、白狐さんはまんべんなく満足する白さになつた。離れて確認しても浮いていなかつたので、熱風を送つて自分の服と一緒に乾かした。わたしの服は薄く赤茶色のまだらが残つてしまつたが、しあうがない。この服はもう着れないな。乾き終わった白狐さんの体毛はさらさらしていて、熱が残つていた。最後にひと撫でして、離れる。この生き物をまじまじと見た。二尾の白狐なんて図鑑に乗つていなかつたなあと思つた。尻尾一本が五歳児ほどもある。ううん本当に500年も生きているのだろうか。詮無きことか。

さて。どうやって帰るか。一々上まで飛んで街の方向を確認しながら帰るか。魔素晶が足りるといいが。使いきつてしまえば、道を失つたのでぐるぐる回ることになるだろつ。

なにかが。飛ぼうとしたわたしの頬をするりと撫ぜた。肌が粟立つた。尻尾が目の前にあつた。その二尾は、空気一枚越しで触れるようになつた。首と頬を包み込んでいる。血が一気に足に落ちた。背筋を怖気が走つた。

命を握られている。

その、可能性はあつた。信用、したわけではなかつた。はずだ。しかしあたしは、なぜ逃げなかつた。濃度が低いからか、知らないものを、前に。そうか、やはり前後を失つたのか。

纏まらぬ問答をする頭のはしで、やけに左指の先だけ感覚が鮮明だ、と思った。矢先、そこを一尾に絡め取られた。戦慄した。心まで、握られているというのか。耳元で心臓が鳴つた。意識して細く息を吸い、吐かねばならなかつた。触れるか触れないかでわたしの首筋をくすぐるもう一尾。脈がばれていのではないか。この、早い脈が。わたしの内心が。すべてが。足許がおぼつかない。呼吸をするたびどんどん息苦しくなつてゆく。駄目だ、乱れる。

はあ、っと肺の空氣を吐ききつて、思いつきり吸つた。ぐらりと景色が影絵のように回つた。間違なく倒れた、と思つたのにわたしは中腰でなんとか立つていて。世界がきゅうに戻る。

白狐は背を向けてどこぞへ進んでいた。わたしの首からは尻尾が外れていたが、手を引かれた。ピンと尻尾とわたしの腕が張ると、狐は振り返つた。白狐ははじめとおんなじ、あんまり美しくて。わたしに、恐れを与えないくて。

わたしはやはり前後もなく、白狐の後をついて歩いた。

無言でされるがままに進めば、そこは森の外だつた。手から尻尾を外した白狐はごく優雅にわたしの横についた。混乱しながら、どうも白狐さんはわたしを森の外まで送つてくれたのだな、と結論付ける。やはりといつていいか、彼には並々ならぬ知性があつた。

「ありがとう」

半ば呆けたまま礼を言った。

次は、そうだ、二人はどうなつたつけ。一人ともわたしよりはるかに優秀なので大事ないとは思うが、見当たらない。集合場所の指定でもしておけばよかつた。森の入り口にいなければ、わたしの家あたりが確率が高そうだ。とりあえず、森の外周を回つてみよう。

そこここ急いで探索したところ、一人とも見当たらなかつた。白

狐さんはその間わたしの尻を追いかけてきた。

森の周りだから、ついてきてくれているのだと思ったのだけど。家に向かおうとしてもまだ狐さんはわたしの横で尻尾を遊ばせながら追いかけてきて。血を、落とす以外は、極力自分から触れたりしないように気を張っていたんだけれど、なあ。正面から、白狐さんの金色の瞳をじいと見つめた。白目がない、動物の瞳だ。底が知れない。

「……うちに来る？」

首もとを撫でようと伸ばした手は、その前に舌でべろりと舐められた。真っ赤な粘膜からエナメル質がつるりと覗いた。

肯定なんだろう、と思う。そういうえばこの狐は鳴かない。狐、では毎度呼びにくいし、名前をひとつ描かせてもらいたい。名前をつけるなんて傲慢だろうな。この子には知性がある。既に名前があるのかもしれないが、何となく聞きたくなかった。

「シロエって呼ぶね、いいかな」

見つめた瞳は一切の搖らぎを見せない。揺るがず、触り心地がよく、きれいで、強い。理想的な友人だった。あだ名も考えたほどの仲良しだ。

シロエは何を食べるのだろう。人間と同じなら、楽でいいなあ。ゆらゆら揺れるふわふわの尻尾を触れたり触れなかつたりしながら、世界に向かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8191w/>

リワコさんの大冒険

2011年10月10日03時25分発行